

西ベルファストの平行線：確執の都市風景

トム・ギル

前書き

1998年のベルファスト合意¹以来、北アイルランドの事情は凄まじい変化を見せている。軍事闘争の面では2005年カトリック・共和主義テロ組織 Provisional IRA (PIRA; 通称“the Provos”; IRA 暫定派)は武装解除を宣言し、国際観察者の前で武器を破壊した²。IRAの伝統的な敵である様々の忠誠派武装組織³ (loyalist paramilitary sects)はIRAを信じずすぐには応じなかったが、その主な組織であるアルスター義勇軍 (Ulster Volunteer Force、UVF)とアルスター防衛協会 (Ulster Defence Association、UDA)はしぶしぶ武装解除に動いて、両方とも2007年に武装闘争終了宣言し、それぞれ2009年、2010年IRAと同様に国際観察者の前で武器を破壊した。

一方政局も激変して2007年の総選挙で、DUP (Democratic Unionist Party、民主ユニオニスト党)のイアン・ペーズリー (Ian Paisley、プロテスタント宗派の牧師・北アイルランドは永遠に英国に残るべき論者)は北アイルランドの first minister (主席大臣)になり、Sinn Féin (シン・フェイン党、ゲール語で「我々」、IRAと関連する共和主義・社会主義の政党)のマーティン・マギネス (Martin McGuinness、カトリック宗派・北アイルランドは南アイルランドと統一すべき論者・元IRA大物)は deputy first minister (副主席大臣)になった。

こういった動きはつい最近までとてもあり得ないものだった。1969年、イアン・ペーズリーはマーティン・マギネスに関して「地獄に落ちてほしい」⁴と言ったが、2010年、マギネスと一緒に働いていた期間を振り返って「むしろ神様の情けで救われ、天国に行ってほしい」⁵と言った。反カトリックの問題発言で有名なペーズリーが、IRAの関係者と権力を分けて⁶こういう許しの言葉を発するのは、やはり、劇的である。今の北アイルランドと15年前のそれは、やはり、天国と地獄のように違うと言っても決して過言ではない。世界の民族・宗教・政治紛争がなかなか収まらない中、極めて稀な「ハッピー・エンディング」が見えたかのように思えた。

ところが、西ベルファストの道を歩くとその楽観主義な気持ちが早くも消えてゆく。まだまだ宗派の関係は難しく、プロテスタント地帯とカトリック地帯の間に「平和の壁」 (peace walls)⁷が10ヶ所以上残っている。その壁や近くにある民家や会社の壁に昔の戦い・敵の虐待・味方の犠牲者が生々しく描いてある。

写真1：平和の壁



この確執の都市風景で、なおかつ宗派別の学校で育てられている子供達が将来「仲良く」なるのは考えにくい。北アイルランドでは、庶民の意識は政治家の進歩に追いついていないようである。この小論文では西ベルファストの壁画を見ながら、現代北アイルランドの宗教派閥主義を考えたい。

歴史的背景

「アイルランド問題」(the Irish problem)を理解するには、まず少なくとも16世紀まで遡る必要がある。1541年、イングランド国王ヘンリ八世は自分のタイトルに「アイルランド国王」を付け加えた。12世紀からイングランドは様々な形でアイルランドを支配していったが、両国の関係はもっと緩やかなものだった。アイルランドはローマ法王の権力を認め、イングランド王はローマ法王の代理という形で支配し、徴収した税金をローマ法王に渡す義務があった。ヘンリ八世はローマ・カトリック教会を脱退し、イングランド教会はカトリック教会から分離独立、その主はローマ法王からイングランド王に変わった。しかしアイルランドはまだローマ法王の権力を認め続けた。これが現在に至るアイルランドの宗教問題の根幹である。

1606年から、イングランドが北アイルランド(アルスター)の植民地化を始めた。送られた植民者の多くはスコットランド人であり、アルスターの「英国忠誠派」(loyalists)の多くは、もともとイングランド人ではなくスコットランド人であったのは事実である。

17世紀の中旬、イングランドは内戦状態になり、1649～50年、一時的にイングランドを共和国にして支配したオリバー・クロムウェルはアイルランドを侵略した。クロムウェルはカトリック教会に猛反対であり、彼の軍隊は虐殺を繰り返しながらアイルランドの反乱を厳しく弾圧した。今日の北アイルランドではクロムウェルはプロテスタント派のヒーローであり、カトリック派にとってはイングランドの残忍さのシンボルである⁸。クロムウェルは土地を地元の人々から取り上げ、賃金代わりに兵隊に与えた。

クromウェルの死後、ジェームズ二世が英国王になったが、彼はカトリック教会に近づきイギリスのプロテスタント系の貴族の反感を買った。結局オランダのウィリアム王子（「オレンジ公ウィリアム」、William of Orange）がイングランドを侵略し、ジェームズは（カトリック信者が多い）アイルランドに逃げた。ウィリアムが追及し、1690年にベルファストの120キロ南にあるドロヘダ（Drogheda）で、ポイン川の戦い（Battle of the Boyne）で破った。「オレンジ」の由来は「オレンジ色」とは関係なく、フランス南部の地名「オランジ」からだが、ウィリアムの支持者はオレンジ色の服を着たりして、現在でもプロテスタント信者のシンボル色でありオレンジメン（Orangemen）とかオレンジボーイズ（Orange boys）はアイルランドのプロテスタント信者の代名詞になっている。一方カトリック・共和主義系の支持者はアイルランドの色である緑をシンボル色にする。

ポイン川の戦いから約100年間経った1796年に「オレンジ会」（Orange Order, Orange Lodge など⁹）が発足したが、現代のプロテスタント系準軍事集団はその会にルーツがある。7月12日はポイン川の戦いの記念日¹⁰で、現在でもその日は北アイルランドの市町村でプロテスタント系の集団がバンド行進を行う。音楽は軍隊調音楽隊の制服も軍服に近い。一般男性メンバーは黒いビジネス・スーツと山高帽姿で「英国人である」ことを強調する。わざとアイルランド共和派のカトリック信者の集中街を歩き、挑発する。近年は撃ち合いこそ殆どないが、殴り合いや石の投げ合いはよくあり、警察は放水銃で暴徒を抑えるのはまだまだよくある。北アイルランドの治安の悪さを意味するか、イングランド本土よりピリピリする警察の過剰反応なのか、意見は様々である。2012年7月12日のポイン川の戦い記念行進では暴動が、主にプロテスタント派とカトリック派が混ざっている北ベルファストで見られ、9人の警官が怪我をした¹¹。英国紙の報道を引用する：

「二つの派閥（プロテスタントとカトリック）はお互いに“カス、カス”とシュプレヒコールし、一時は白兵戦になろうとしていた。」¹²

19世紀にはアイルランド全体の人口は80%カトリックで、北部のアルスターだけにはプロテスタント系が多数だった。1845～52年のジャガイモ飢饉もあり、アイルランドがイングランドに搾取されているのは明らかだった。アイルランド独立運動は次第に強まり、1916年に復活祭蜂起（Easter Rising）があった。第一次世界大戦の真最中で、イングランドがドイツとの戦争で普段の戦力を発揮できない隙間を狙った。蜂起は鎮圧されたが、処刑されたリーダーたちはカトリック派のヒーローになり、生き残ったエイモン・デ・ヴァレラは6年後の1922年に、漸く独立国になったアイルランド共和国（Eire、エアラ、南アイルランド）の最初の大統領になった。それと同時に英国のアイルランド統治法により、アイルランドは正式に分裂し、独立した「南」と英国連合王国に残った「北」という構図が生まれた。

これは北アイルランドのプロテスタントに危機感を募らせた。彼らは英国への忠実性を強調し、第一次世界大戦時は、アルスター部隊（英国軍第36師団）として参加、大きな犠牲を払いながら英国軍の一部として戦った。特にフランスのソンムの戦いで数千人のアルスター兵が2日間で

戦死し、現在の忠誠派にヒーローとされている。第2次世界大戦でも、アルスターは英国サイドで戦い、王立アルスターライフル連隊（Royal Ulster Rifles）はダンケルクやノルマンディーの有名な戦いに参戦した。一方、第二次大戦時エアラは中立だった。

アイルランド分裂以降、北アイルランドのカトリック系マイノリティは差別を受け、教育・就職・政治の場で機会の不平等に苦しんでいた。そのため人権運動が盛り上がりと同時に、南と合併して統一アイルランドを求める運動もあった。1969年からその二つの運動がエスカレートして、北アイルランドは内戦に近い状態になった。この期間は「北アイルランド紛争」などと呼ばれることが多いが、当地では単なる「ザ・トラブルズ」（The Troubles、「難事」）と呼ばれ、1969年から1998年のベルファスト合意までの約30年間を指す。その前も後も暴力事件があったが、北アイルランドが、パレスティナや南アフリカやバスクの問題と一緒に世界の注目を浴びたのは、主にこの時期である。

1966年、プロテスタント準軍事集団 UVF¹³が発足して、カトリック準軍事団体のIRAに対して宣戦布告して、数名のカトリック信者を殺した。1968年、カトリック系人権運動家たちは北アイルランドのタイローン州の民家で座り込みを始める。公立住居が不当にプロテスタント系の人に割り当てられていることに対する抗議で、王立アルスター警察隊（Royal Ulster Constabulary; RUC）に逮捕される。そして1969年8月、北アイルランドの第二都市であるデリー（Derry、英国では Londonderry）のカトリック系住居団地であるボグサイド（the Bogside）で大きな暴動が発生し、ついにベルファストなど北アイルランドの都市に拡大して、英国軍隊が北アイルランドの都市に配置され、「難事」が本格的に始まる。その30年間の闘争をこの小論文で分析するのは無理だが、結果として北アイルランドで殺されたのは約3500人であった。ピークは1972年で、その一年間だけで480人が殺された。そのあとの4年間で毎年200～300人が殺され、1971～76年には全期の半数の1756人が死んだ¹⁴。地理的に、犠牲者の4割強に当たる1540人がベルファストで殺され、中でも西ベルファストは623人、北ベルファストは576人で、圧倒的に犠牲者が多かった。

被害者の所属の内訳は図1のとおりである：

図1：北アイルランドの「難事」（1969～98年）
殺害被害者の属性

被害者の属性	死者数
英国軍（含警官6名）	724
北アイルランド警察（RUC）	301
北アイルランド刑務所警備員	24
南アイルランドの軍隊・警察	10
IRA 他共和系準軍事集団	394
UDA 他、英国帰属支持者	151
一般市民	1,855
合計	3,459

出典：CAIN（Conflict Archive on the Internet）

<http://cain.ulst.ac.uk/>

一方、加害者の内訳は図2の通りである。

図2：北アイルランドの「難事」（1969～98年）

殺害加害者の属性

加害者の属性	殺した人数
IRA 他共和系準軍事集団	2,057
忠誠派武装組織	1,019
英国軍・英国警察	363
不明	82
南アイルランド軍隊・警察	5
合計	3,526 ¹⁵

出典：CAIN（Conflict Archive on the Internet）
<http://cain.ulst.ac.uk/>

死者 3500 人、それが多いか少ないかは、何と比べるかにもよるだろうが、30 年間毎日殺される可能性があるという不安が北アイルランドにあったのは事実である。と同時に傷害事件は毎日あり、鉄砲の発射音は毎日響き、精神的なストレスは大変なものだった（図3 参照）。

図3：「難事」期間中の殺害以外の主な事件

事件類	件数
負傷	47,541
発砲	36,923
強盗	22,539
爆弾攻撃（含：未遂）	16,209
放火	2,225

出典：CAIN（Conflict Archive on the Internet）
<http://cain.ulst.ac.uk/>

前述の通り、北アイルランドの政治家はやっとこの「難事」を終わりにすることができ、近頃北アイルランドの路上に爆弾テロや鉄砲の殺し合いは殆ど消えた。ベルファスト合意が成立した1998年、アルスター・ユニオニスト党（Ulster Unionist Party; UUP）党首のデヴィッド・トリンブル（プロテスタント・忠誠派）と社会民主労働党（Social Democratic and Labour Party; SDLP）党首のジョン・ヒューム（カトリック・共和派）は二人でノーベル平和賞を受賞した。彼らは両サイドの交渉担当者だったが、その快挙に一人の優秀なイングランド人女性政治家も大きな役割を果たした。それはモー・モーラム（Mo Mowlam）、英国の労働党代議士で1997年から1999年までトニー・ブレア内閣の北アイルランド担当大臣。「テロリストと話し合わない」という「常識」を破り、忠誠派の殺人罪の囚人やIRAのリーダーと話し合い、ベルファスト合意成立に大いに貢献した¹⁶。

ベルファスト合意は1998年4月10日に成立した。その4ヶ月後の8月15日、難事の最悪な事件が発生した。それはオマー爆弾テロで、オマーという小さい地方都市の中心で自動車爆弾が炸裂し29人が死亡、220人が負傷した。加害者は「真のIRA」(Real IRA; RIRA)という、IRAから離脱した派閥であった。

いつもの北アイルランドなら、これに対し忠誠派は報復を求めて事件を起こしたはずである。しかしIRAの関連政党であるシン・フェインの党首ジェリー・アダムズを含めてすべてのカトリック系政治家は事件をテロとして弾劾し、忠誠派がこれを受け入れて報復テロ事件はなかった。「真のIRA」は3日間後、謝罪を発表した¹⁷。「真のIRA」はまだ存在し、殺人を含む活動をしている。だが難事の時代と比べ、北アイルランドは「平和」であると言える。

ベルファストの両共同体

妙なことに、極端な暴力が消えても、北アイルランドのプロテスタントとカトリックの両共同体は特に「仲良く」なる気配はない。どちらかと言えばその社会分裂が更にはっきりしている。例えば2002年の調査では下記の結果があった：

1. ベルファスト在住の18～25歳の人の68%は、もう片方の共同体¹⁸の人と「意味のある会話」(meaningful conversation)をしたことがない。
2. 年齢問わず、ベルファスト住民の72%は、もう片方の共同体の病院に絶対に行かないし、78%はそこの店を絶対に使わない。
3. ベルファスト住民の58%は、自分が安全だと思う店・クリニック・娯楽施設に行くために、最寄りのそれより倍以上の時間を使ってもいいという。
4. ベルファスト在住の失業者の62%は、社会福祉事務所がもう片方の共同体の縄張り内ならば失業手当受給に登録しない。
5. ベルファスト住民の62%は、1994～2002年では共同体同士の関係が悪化していると考ええる。

(Shirlow and Murtagh 2006)

かなりショッキングな結果である。1994年は歴史的なIRA停戦宣言、1998年はベルファスト合意。つまり94年～02年という、北アイルランドの政治がやっと平和に向かっていたのに、庶民たちの意識はそれに沿っていない。この調査を行ったクイーンズ大学¹⁹のピーター・シャーロー教授は悲観的で、ベルファストの両共同体の市民たちは当分お互いを信じることはないと主張する(同)。シャーローが皮肉も込めて指摘する：ベルファストのカーンモニー墓地(Carnmoney Cemetery)には今でもカトリックとプロテスタントを分離する地下壁がある(同：13)。時にはもう片方の墓を荒らしたり、小便をかけたりすることがある²⁰。

上記の「2共同体」というとき、単なるプロテスタントとカトリックではない。政治・経済・スポーツなどの面もある(図4参照)。

図4：北アイルランドの「両共同体」（著者作成）

項目	プロテスタント系	カトリック系
宗教	プロテスタント・キリスト教	カトリック・キリスト教
国の属性	英国、英国連合派（Unionist）・英国忠誠派（Loyalist）	アイルランド、愛国派（Nationalist）、共和派（Republican）
政治	保守主義	社会主義
色	オレンジ	緑
サッカー応援	グラスゴー・レンジャーズ	グラスゴー・セルティック
相手が用いる差別用語 ²¹	Prod, Proddy, Orange bastards, Huns 等	Fenians, Taigs, Papists 等

忠誠派の一番怖いシナリオは、カトリック教信者が次第に人口を増やし、つい多数になることである。カトリックの方が生活水準が低く、貧困家庭は裕福な家庭より出生率が高いという傾向があり、それにカトリック教会は避妊や中絶を認めないため子供が多いとも言われる。1922年のアイルランド分裂の時期、アルスターの9州のうち6州だけが北アイルランドに組み込まれた主な理由はこれと関係がある。残り3州は圧倒的にカトリックが多いから、それらを含むと北アイルランドのプロテスタント派は「マイノリティ」になっていた。北アイルランド政治の緊張感には、この人口比の問題が常にある。両共同体はマイノリティである。カトリックは北アイルランドの少数派だが、プロテスタント派はアイルランド全体の少数派である。

さて、カトリック派は確かにプロテスタント派より出生率が高いが、北アイルランドのカトリック信者は長年人口の約3分の1に当たり、1937年は33.5%、1961年は34.9%であった（Mulholland 2003: 24）。カトリックは貧困から逃れるため出国して移民する割合も高く、1937～61年では、カトリック人口の21%が出国したのに比べ、プロテスタント人口の出国率は8%に留まった（同）。このようにカトリックが受けた厳しい差別や経済の不平等により、両派閥の多数・少数のパターンは出生と出国のバランスで維持されてきた（同）。しかし近年そのバランスが崩れ始めた。英国国勢調査によると北アイルランドのカトリック人口は、1991年で38.4%、2001年で40.3%になっていた。2011年に、北アイルランドの新聞ベルファスト・テレグラフは「北アイルランドの学校の生徒たちは51%カトリックである」と報道した²²。北アイルランドの大逆転がようやく現実味を帯びてきた。

だが図4の特徴は必ずしも「ワンセット」になると限らない。カトリックが増えているが「アイルランド統一化」を支持する人は増えていないようである。むしろ、アイルランド統一を支持するのは少数派で、確実に減っている（図5参照）。

定期的に行われる「北アイルランド生活・風俗調査」（Northern Ireland Life and Times Survey; NILTS）のアンケート調査によると「南アイルランドと統一したい」と思う人は1998年のただでさえ低い22%から2010年ではわずか16%まで減少した。一方同期間では「英国の一部として残りたい」と答えたのは56%から73%に上がった。プロテスタント系は1998年に85%、2010年には90%で、英国残留意識は不動である一方、カトリック系では同期間「南アイルランドと

統一」が 49%から 33%に減り、「英国残留」は 19%から 52%に跳ね上がった。原因として考えられるのは：

- (1) ベルファスト合意以降カトリック共同体の権利は以前よりしっかりと守られ、過去のように権力から排除されている意識が緩んでいる。
- (2) 2007 年の NILTS 調査以降「英国残留」の選択に「直接統治」と「北アイルランド議会」というオプションが加えられ、圧倒的に後者の方が人気である。2010 年では直接統治は 15%で北アイルランド議会は 58%であった。ここ 15 年間英国連合王国が変わりつつあり、90 年代の末以降スコットランドとウェールズはそれぞれ議会を設けて独立性を増やしている。これで昔ほどイングランドに支配されていないのは明らかで、「独立」と「イングランド支配」の間に第 3 選択肢が現れた。
- (3) 一時バブル経済が発生した南アイルランドの経済がバブル崩壊で最近不景気であること。2010 年の調査はちょうど南アイルランドが IMF と EU に緊急援助を受ける時期と重なった。最近ユーロ圏の危機でユーロを使用する南アイルランドの経済はさらに不安定に見えるようになっている。

以上で現代北アイルランドの微妙な政治・社会状況が分かるだろう。プロテスタント系の共同体は次第に多数から少数になりつつある一方、カトリック系の共同体は政治的な団結を失い、多数になっても南アイルランドと合併し独立なアイルランドを勝ち取る可能性が極めて薄くなってきた。しかし北アイルランドの政治は相変わらず「英国連合派」(Unionist) 対「アイルランド愛国派」(Nationalist) という軸に沿って動くには変わらない。図 6 を見ると英国連合派のカトリック人は 1%のみでアイルランド愛国派のプロテスタント人は 0%。「どちらでもない」と答える人が増えてはいるが、政治的な属性と宗教的な属性は相変わらず、緊密な関係にある。たとえカトリック信者の過半数は実は英国連合に残りたいとしても、英国連合派の政党に投票するのは殆どあり得ない。矛盾には見えるが、この政治的なラベルは国の憲法的な構造をはるかに上回る歴史的な敵対性の意味がある。

以上の背景を頭に置き、ベルファストの両共同体を別々に分ける「平和の壁」を見ていこう。

図 5：北アイルランドの将来に関する世論調査（宗教別）2010 年

意見	カトリック	プロテスタント	無宗教	合計	98 年合計
英国に残る（直接統治）	6%	21%	14%	15%	56% ²³
英国に残る（北アイルランド議会）	46%	69%	47%	58%	
南アイルランドと統一	33%	4%	17%	16%	22%
北アイルランド独立国家	4%	1%	4%	3%	6%
その他	4%	1%	7%	3%	3%
意見無	8%	3%	10%	6%	13%

出典：（北アイルランド生活・風俗調査（Northern Ireland Life and Times Survey, NILTS）

http://www.ark.ac.uk/nilt/2010/Political_Attributes/UNINATID.html

図 6 : 宗教所属と政治意識

	カトリック	プロテスタント	無宗教	合計
英国連合派 (Unionist)	1%	65%	10%	34%
アイルランド愛国派 (Nationalist)	54%	0%	6%	20%
どちらでもない	45%	34%	82%	45%
その他・分からない	1%	1%	3%	1%

出典：図 5 と同じ

平和の壁

ベルファストやデリーの両共同体を別々に分ける「平和の壁」・「平和線」は、難事が始まった 1969 年から現れ始めた。作ったのは英国軍である。当時英国軍の北アイルランド司令官、イアン・フリーランド中将 (Lt. Gen. Ian Freeland) は：「この平和壁はととてもとても一時的なものである。ベルリンの壁のようなものがこの都市に現れるというわけではない」と断言した²⁴。しかし皮肉なことに、ベルリンの壁が崩壊して 20 年間以上経った現在でも、北アイルランドの数多い壁はまだ健在である (McDonald 1999 参照)。しかも、紛争が終わってから、数・長さとともに伸びている (Shirlow and Murtagh 2006)。

ベルファストやデリーの壁は、昔のベルリンの壁ほど絶対的なものではない。壁を越えようとする人が軍隊に撃たれて死ぬことはない。場合によりゲート (写真 2) があり、ゲートは昼間開いていて夕方閉鎖する。或いは、常時開放、非常時閉鎖というパターンもある。閉鎖時でもどうして越えたければ、回り道ができる。しかし、越えようとする人はあまりいない。ベルリンの壁ともう一つの大きな違いは、地域住民が求めたからこそ壁が作られたという点である。理想として皆で暮らせればいいと認めても、現在は壁がないと安心できない人が大多数である。例えば、ベルファスト住民に平和の壁に対する意見を求めた 2008 年の 1037 人アンケート調査²⁵ では、21%だけは「即座に撤去してほしい」と回答し、17%は「ずっと残っても平気だ」と回答した。その両極端の間で、60%は「安全になったら撤去してほしいけど、今は無理」と言っており、ここにもベルファストの難しい実態がはっきり描かれている。

写真2：平和の壁のゲート（閉鎖中）



ベルファストの中心には平和の壁がない。中心部は堂々とした英国の地方都市で、プロテスタントの地帯・カトリックの地帯はない。ベルファスト中心の会社は（少なくとも表面的には）宗教派閥主義的な色彩はなく、一緒に働く同僚の宗教が分からないことがある。街の中心は割合裕福な、穏やかな雰囲気である。ところが、郊外に向かって行くとだんだん街並みが変わる。特に西・北の方へ行くと社会経済的に貧しい地区が目立つ。警察が装甲車で巡回している。平和の壁の近くは人間の姿が少なく、不気味な雰囲気がある。「平和の壁」と呼ばれるものは様々で、人間の侵入を防ぐ簡単な有刺鉄線のフェンスもあれば、丈夫な、石を強く投げても越えそうもない煉瓦壁もある。北アイルランド全体に平和の壁は合計 21 キロあり、その大半はベルファストにある。外部の人に分かりにくいのは、中心で働き、仕事の同僚にもう片方の共同体の人がいて、その人と仲が良く一緒に飲み食いすることがありながら、郊外の家に戻ったらその人と会うことはなく、知り合いであることも認めてはいけない、その人の家に遊びに行くことはあり得ないことである。

一番有名な平和の壁は、西ベルファストのフォールズ・ロード（Falls Road、最大のカトリック集中街）とシャンキル・ロード（Shankill Road、最大のプロテスタント集中街）の間に約 2 キロ走る。高さは約 7 メートルで、その上にさらに約 5 メートルの金属バリアがある（写真 1 参照）。プロテスタントサイドとカトリックサイドの雰囲気はかなり違う。まず、プロテスタントサイドは比較的家が少なく、家と壁の間に道路があり 10~20 メートルの空間があるところが多い。一方カトリックサイドは家が密集し、壁に隣接するところが多い。その隣接する家は小さな裏庭があり、その上に金網が張ってある。プロテスタントサイドから投げられる石や煉瓦や金属破片などへの自己防衛である。

写真3：シャンキル・ロードのパブ



シャンキル・ロードは英国の愛国主義の一大展示会である（写真3）。英国国旗、「ユニオン・ジャック」があらゆるところに見られ、エリザベス女王や忠誠派の歴史的人物の肖像が目立つ。一方フォールズ・ロードはシャンキル・ロードほど大げさではないが、アイルランドの国旗やアイルランドの歴史的人物、IRAの殉教者の肖像が目立ち、「あいつらに殺された我々の犠牲者」という難事のメモリアルが目立ち、「絶対に忘れない」というようなスローガンがあちらこちら見られる。しかしこれは「ヒロシマを忘れるな」と違い、「あいつらを許すな」という意味合いがどうしても含まれており、これで本稿のタイトルの「確執の都市風景」が出来ている。

西ベルファストに住むのはどういうことなのか。私は一日両サイドを観察してから、フォールズ・ロードから中心までタクシーで戻った。運転手さんに「今日はシャンキル・ロードも見てきた」と言ったら、彼は「いいね、私はそういうことができない」と答えた。彼の雇用者はよく知られているカトリック系タクシー会社で、プロテスタントの縄張りに入ってはいけない。しかしシャンキル・ロードはフォールズ・ロードより北の方向にあるから、たとえば中心から北東部の郊外に帰りたい乗客が乗れば、シャンキル・ロードを遠回りすると運賃が高くなり、困るではないか。運転手さんに聞いたら、こう言われた。「なるべくシャンキル・ロードを避ける。でもどうしても通らなければならない場合は会社の看板を外して、一般自動車に見えるようにごまかして、サッサと入って出る。」彼のタクシーは車体に何も書いてない。簡単なプラスチックな会社看板はすぐ外れる仕組みになっている。

写真4：「フォールズ・ロードを愛する」落書き



あるいは、2008年の新聞記事（Pogatchnik 2008）にあったフォールズ・ロードの主婦とのインタビューでは、彼女はシャンキル・ロードの方は店がよく、できればそこで買い物したいけど、残念ながら無理である、と言う。ただ唯一の例外はケンタッキー・フライド・チキンである。シャンキル・ロードに KFC があり、フォールズ・ロードにはない。シャンキル・ロードに行く唯一の場合はどうしても KFC の持ち帰りミールを買うとき。なるべく早く行き、早く戻り、知り合いに見られないように工夫する。英国にはドライブ・スルーのファストフードはあまり見当たらないが、シャンキル・ロードの KFC はドライブ・スルーで車から降りずに注文できるのが、フォールズ・ロード住民には大きな魅力である。

北ベルファストにアレクサンドラ・パークという、広い、落ち着いた感じの公園がある。この公園は高さ 3 メートルの平和の壁で真二つになっている。2011 年、この壁に初めてゲートが設置され、9 月 16 日に儀式が行われ、開かれた（O'Hagan 2012）。午前 9 時から午後 3 時までしか開かれていないが、カトリックとプロテスタントの和平への一歩ではある。しかし面白いのはこの壁の設立日である。1994 年 9 月 1 日であり、それは IRA が歴史的な停戦（cease-fire）を発表した日である。偶然かもしれないが、平和の壁の歴史を振り返ってみると、政治的な和平過程が進む 90 年代から平和の壁が広がってきたという驚くべき事実が、どうやら、ある。その理由は多分、カトリックの人たちには IRA 武装闘争を断念するとカトリック共同体を守ってくれる勢力が全然ないという恐怖感があり、1994 年の停戦以来ベルファストの平和の壁は約 30 ヶ所から約 40 ヶ所に、確実に増えてきた。一方英国軍が 38 年間続けた北アイルランド作戦が終わったのは 2007 年 7 月 31 日で、同じ 07 年 7 月、北ベルファストに新しい平和壁を作ることが決まった（Bowcott and Oliver, 2007）。このように、平和過程の逆方向というパターンがよく見られる。

西ベルファストの壁画

平和の壁にはたくさんの壁画が飾ってある。それに平和の壁がまだ存在していないときから、

ベルファストやデリーの民家の壁等には壁画があり、北アイルランド全体に約 2000 点があると思われる。プロテスタント派には 20 世紀の始まりから現れたが、カトリック系は 1981 年の IRA ハンスト（下記参照）から始まった（Dartnell 2000）。つまり、プロテスタントの伝統にカトリック派も乗った。北アイルランドの政治的壁画には高い美術性のあるものもあり、ベルファストに来る観光客はよく見に行く。しかし同時にこの壁画は確執の都市風景のエッセンスでもある。アイルランドの名詩人 W.B.イェイツの言葉を借りると「恐るべき美が誕生した」²⁶。

北アイルランドの壁画（ミューラル）に関して佐藤亨は 2011 年、本を出版しており、78 点の壁画を紹介し解説している。北アイルランド紛争と壁画を分かりやすく説明する入門書として推薦出来る。この小論文はスペースが限られているから、フォールズ・ロード周辺とシャンキル・ロード周辺の壁画を 4 点ずつ分析することでとどまる。

写真 5A



写真 5：ボビー・サンズ壁画



1. ボビー・サンズ壁画（フォールズ・ロードとセバストポリ・ストリートの交差点）

ボビー・サンズ（Bobby Sands）は IRA の有名な殉教者でカトリック・共和派のヒーローである。1981 年、囚人になっていたロング・ケッシュ刑務所でハンガーストライキを起こし、66 日目で亡くなった。27 歳。これは IRA の第二ハンストだった（第一ハンストに関して、次の節参照）。ハンストの目的は、英国政府に IRA の囚人を一般犯人ではなく政治捕虜として認めてもらうことであった。20 名がハンストしたところ、最初に死んだのがサンズ。それだけでもヒーローだが、おまけに性格が明るい人で、文章力もあり、広く読まれる詩や手紙をハンスト中でも書いていた。それに、投獄された理由は「武器所持」で、その武器で人を殺した証拠はないから、よその囚人より部外者に殉教者として受け入れやすい人物でもあった。死ぬ 1ヶ月前に北アイルランドの選挙区の補欠選挙で英国国会議員に当選し、葬式には約 10 万人が参加した。壁画では投獄のチェーンが二羽の鳥に壊されている。下の方は雲雀で、詩人・文化人のサンズのシンボルである。投獄中、彼は「雲雀と自由の闘士」という記事を書き、雲雀と自分の自由を愛する共通

点を指摘する²⁷。上の方は鷹で、闘士としてのサンズのシンボルである。

彼の名言が二つ黄色な大文字で出ている。左は「誰でも、共和主義者ではあってもなくても、自分特別の役割がある」(EVERYONE, REPUBLICAN OR OTHERWISE, HAS THEIR OWN PARTICULAR ROLE TO PLAY)、右の方は「我等の仕返しは子供の笑い声にある」(OUR REVENGE WILL BE THE LAUGHTER OF OUR CHILDREN)。いずれも簡単ながら両義的な発言である。前者は「みんなで頑張りましょう」というありきたりの発言だが、その「みんな」に共和派以外の人を含むというなら、サンズが殺そうとしていたプロテスタント派とか英国軍も指されるようである。著者が調べた限り共和派の人がよく引用するこの名言は誰も説明しようとしないう。一方、子供たちが笑うのは、統一アイルランドが実現でき平和に暮らしているからなのか、それとも忠誠派を完全に破ったからなのか、やはり、はっきりしない。絵の下に「ボビー・サンズ代議士、詩人、ゲール語話者、革命家、IRA 志願兵」とある。

IRA のヒーローは渋い顔で描かれるのが普通だが、サンズは優しい笑顔が特徴。投獄中の有名な写真がモデルである。自由を象徴する青空と虹が背景にある。右と左に見られる紋章は 1798 年、対イングランドの反乱を起こしたアイルランド人連盟会 (Society of United Irishmen) のものである (写真 5A 参照)。アイルランドの堅琴が天使のデザインになり、上の大文字の言葉は「平等」(EQUALITY)、下の方は「(アイルランドの堅琴に) 新しく弦が張られ、聞かれる」(IT IS NEWLY STRUNG AND SHALL BE HEARD) という連盟会のスローガンである。これで 20 世紀のサンズと 18 世紀のアイルランドの独立運動家を関連付ける。United Irishmen とは、カトリックとプロテスタントが団結してアイルランドの独立のために頑張るべきだという意味合いがあり、左のサンズの名言は同じようなテーマである。こういう風に、サンズの敵はプロテスタント人ではなく、アイルランドを昔から支配したイングランドであり、彼はアイルランド人全員のヒーローとして描かれている。バルフアストのプロテスタントはこれを悪い冗談のように思うに違いない。

ちょっと皮肉なことに、サンズの肖像の左に監視カメラが設置してある (写真 5A)。その壁画を損なおうとする人を止めるためではあるだろうが、同時にサンズが脅かした英国系の北アイルランド当局の社会管理の意味もある。

写真6：キエラン・ニュージェント壁画



2. キエラン・ニュージェント (ディヴィス・ロード)

ディヴィス・ロードはフォールズ・ロードの中心寄りの部分の名前である。キエラン・ニュージェント（あだ名、「ヘッダー」Header²⁸）はボビー・サンズの前にベルファストのロング・ケッシュ刑務所で反英抗議したIRAメンバーで、「最初のブランケット・マン」(first blanket man)として知られている。1976年9月、ロング・ケッシュに入ったとき、英国政府が逮捕されたIRAのメンバーを政治捕虜として認めない政策を実施したばかりで、そこまでは私服を着るのは認められていたのに、これからは囚人服を着なければならない。ニュージェントはそれを拒否し、有名な発言をした：「囚人服を着せるなら、釘で背中に着けるしかない」(They'll have to nail it to my back)である(McCann 2000)。それ以外に服がなかったから、ニュージェントは裸になり、服の代わりに毛布を使った。それが「毛布運動」の始まりで、結局約40人の「ブランケット・マン」が参加した。78年からは独房からトイレに行くことも拒否し、「汚れ抗議」(dirty protest)にエスカレートした。ニュージェントは1980年で第一ハンストに参加した。そのリーダーは壁画の右上にあるブレンダン・ヒューズ(Brendan Hughes、あだ名、「ザ・ダーク」the Dark、暗い奴)であった。彼もブランケット・マンでハンストしたメンバーで、この絵は毛布にくるまった、髭を伸ばしている彼の痩せ細った姿の有名な写真のコピーである。右下にある顔写真はヒューズの投獄前の元気な姿で、その違いは劇的である。ヒューズはIRAのタカ派で、ハンスト作戦に消極的だったIRA司令部に反対してハンストを始めた。彼はサンズと同じロング・ケッシュ²⁹刑務所において、ちょうどこの頃英国政府はロング・ケッシュを強化して新しい留置所を作ったところであった。その建物はエイチ(H)型なので、H-Blocksと呼ばれた。両サイドの一番危険とされる囚人はHブロックに入っていて、殺人事件を含むトラブルが多かった。ヒューズの頭の上に「壊せ！Hブロック」(SMASH! H-BLOCK)と書いてあるのは、その建物がイングランドの対アイルランド共和派弾圧のシンボルになっていたからである。

そのハンストで5つの要求があった：(1) 囚人服免除、(2) 強制労働免除、(3) よその囚人と

の交際、教育・娯楽の活動をする権利、(4) 週一件ずつ面会、手紙、差し入れを貰う権利、(5) 抗議のため取り消された刑期短縮を返してもらうこと。壁画の右下にある「5 要求の支持を」(SUPPORT THE FIVE DEMANDS) はこれを指している。

左上には指名手配のポスターが描かれていて、その「犯人」は他ならないマーガレット・サッチャーである。当時サッチャーは英国首相で、IRA の宿敵であった。後に「鉄の女」というあだ名がつけられた理由の一つは IRA と闘ったためであった。しかしこの風刺的なポスターでは犯罪者となり、その犯罪は「アイルランドの囚人の殺人・拷問」(WANTED for murdering and torturing Irish prisoners) となっている。その下に当時の、ハンストの親戚によるデモの呼びかけのポスターがあり、ニュージェントの左肩の上にある緑の字はベルファスト RAC と書いてある。これは「親戚行動委員会」(Relatives Action Committee) という意味で、やはりハンストの当事者の親戚のプロパガンダである。

サンズ壁画と比べたら文学的な、ロマンティックな様子はない。むしろ歴史的資料がたくさん集まっている。しかしそれにしても、独特な雰囲気がある。ニュージェントの頭の上に「勝利」(VICTORY) という言葉がやっと見えるが、ニュージェントの顔の表情は決して勝者の笑いではない。彼の悲しげな青い目と迷っているような表情はむしろ IRA の玉虫色な闘争とその結果を物語る。隣にあるヒューズのハンスト姿は今でもショッキングであり、ニュージェントとヒューズのその後は勝利的なものではない。

ヒューズは 1980 年 12 月 18 日、53 日間も続いた IRA 第一ハンストを終わりにした。その主な理由が二つあった。(1) サッチャー政権が 30 ページにも及ぶ提案書を発表し、言葉運びはあいまいだが、「5 つの要望」に応じる意思があるようにも読める内容だった、(2) 一番若いストライカー、ショーン・マケナー (Sean McKenna) は弱ってしまい、死にそうだった。直ぐ英国政府の提案を受け入れなければ、マケナーが死ぬ。それでヒューズはハンスト中止を決断し、マケナーが生き残った。しかしサッチャー政権の提案書をよく読むと、英国政府提案は決して IRA の 5 つの要望に応じるような内容ではなかった。その翌年、サンズのリーダーシップで第二ハンストが始まった。亡くなったサンズは殉教者になり、生き残ったヒューズやマケナーやニュージェントは IRA 関係者以外に忘れられた。

ブレンダン・ヒューズは 1986 年釈放されたが、ハンストで体が弱っていたし、教育も資格もない前科者であり建設現場で低賃金の日雇い労働するのが精一杯だった。イングランド・忠誠派と妥協した IRA のリーダーたちを厳しく批判した。目の前でシン・フェイン党が権力を増すのに、上記の図 5・6 で見たように、アイルランドの統一はむしろ遠ざかった。アイルランド全土で社会主義のユートピアを夢見たヒューズには単なる「敗北」に過ぎない。それに武装闘争をやめた彼の盟友、ジェリー・アダムズは共和主義を裏切り、労働階級も裏切り、イタリア・スーツを着る、南アイルランドに立派な別荘を持つ裏切り者としてヒューズが厳しく批判した。

ヒューズは 2008 年 2 月 16 日、病死した。59 歳。お葬式の時、ジェリー・アダムズはお棺を運ぶ男の一人だった。

一方キエラン・ニュージェントはそのずっと前、2000 年 5 月 4 日、やはり病死した。42 歳。彼に関してヒューズが書いた：「キエランは 2000 年に亡くなったよ。川のドブネズミと呼ばれた。

それは最期の日々はポールグラスの川沿で酒飲んでたからさ。」³⁰

私がこの写真を撮ったのは 2010 年 9 月だったが、ネットではかすかに違うバージョンが何点か見られる。その一つは 2011 年 12 月 31 日のもの³¹ で、(1) ニュージェントはどういう人物だったか、説明が加えられている、(2) ブレンダン・ヒューズの映像を何者かが黄色いスプレーペイントで消している。一方 2005 年版³² は、よく見れば、同じ写真の全然違うコピーだと分かる。壁画はしょっちゅう支持派にアップデート・調整されていて、反対派に塗りつぶされたりしている。頻繁に変わるこの壁画だが、皮肉にも、写真を見る限り一つ変わらないものがある。壁画の前にある歩行者信号は常時赤である。キエラン・ニュージェントの顔を見るカメラマンは「青」でシャッターを下ろす気にはならないようである。

写真 7A



写真 7：自殺防止



←本物のレンガ

←その上に貼ってあるレンガの映像

3. 自殺防止 (フォールズ・ロードとアルベルト・ストリートの交差点)

ベルファストの自殺率は高い。歴史的にアイルランドは、南北とも、高い。南の方はユーロ危機で最近激増中。一方北アイルランドは、ベルファスト合意次年の 1999 年から 2008 年まで 64%増加した (O'Hara 2011)³³。内戦が終わってから、自殺が増え始めた³⁴。北アイルランドの自殺者は圧倒的に若い男性であり、例えば 2008 年の自殺者のうち、77%は男性で 72%は 15~34 歳の年齢層であった (O'Hara 2011)。2010 年、西ベルファストのポールグラスというカトリック団地で、11 歳の男の子と 13 歳の女の子が自殺し、話題になった (同)。

この壁画は、自殺を考えている人に助けを求めよう説得する。絵はじゅうたんを引き上げ、その下の箒で掃いた埃を見せるメイドである。彼女は怒りっぽい顔をして、消えた汚れはちゃんと始末されていなく隠されているだけだと言わんばかりである。これは英語のイディオム

“Sweep [a problem] under the carpet”を指す。つまり、問題があるとなんとなく認識しているのに、それを認めたくないから隠す、という意味で、この壁画は自分の精神的な問題を認めたくない人に自殺をやめさせようとする。

メイドがじゅうたんの下に見つけた「問題」は「借金」「失業」「孤独」「アル中」「虐待」である。彼女の上に四つの色でアドバイスが書いてある：

“Suicide kills two: you, and those who love you” (赤)

「自殺は二人を殺す：あなた、それにあなたを愛する人」

“Never underestimate your problem, or your ability to deal with it.” (緑)

「過小評価していけないのは二つ：あなたの問題、それにあなたのその問題を解決する能力」³⁵

“A true friend never gets in your way unless you happen to be going down.” (黄)

「本当の友達を決してあなたの邪魔をしない。ただし、あなたが落ちていくときだけは邪魔する。」

“You may only be someone in the world, but to someone you are the world.” (青)

「あなたは世界に一人の人間に過ぎないだろうが、ある人にはあなたは世界である。」³⁶

絵の下に八つのカウンセリング・サービスを提供している支援団体の電話番号がある。特に「カトリック」とか「共和主義」の意味合いはないが、電話番号の一つにフォールズ・自治会 (Falls Community Council) と書いてあることで、やはりこれはカトリック地区フォールズ・ロードの壁画だと分かる。良く見れば、メイドの襟に赤と青のリボンが見える (写真 7A 参照)。これは自殺認識・支援の会 (Suicide Awareness and Support Group) のロゴマークである。2000年設立の非営利団体である。さらに良く見れば、これは壁画ではなく、壁に釘で打ち付けてある、壁画の絵だと分かる。絵のバックグラウンドは黒い煉瓦で、後ろの本物の煉瓦は灰色で一回り小さい。本物の煉瓦の上に本物の有刺鉄線がある。

政治・宗教の派閥意識がなく、困っている人を支援するこの映像を一目で見ると、心強い感じがする。しかしスタイルはとても素人的ではあるが、これは地元の個人・団体が作った壁画ではなく、当局がだれかにお金を払って作ってもらった、壁画のまねであることを忘れてはいけない。おそらくこれは 2006 年発足した「コミュニティ塗り替え計画 (Re-imaging Communities Programme、佐藤 2011: 33-35 参照) の産物であろう。アーツ・カウンシル (Arts Council) という公的組織から補助金を貰い、より平和的・教育的・建設的なイメージをベルファストの壁に着ける企画である。予算は 3 百万ポンドである³⁷。「これはミューラルと言えるのかどうか？」と佐藤 (35) は疑問視する。定義はともかく、こういう壁画 (らしきもの) は本物の壁画のように地域住民たちの意識を表現するものとはちょっと違う。

写真8：バスク独立運動支持



4. バスク独立運動支持（フォールズ・ロード）

北アイルランドの共和主義の特徴の一つは、国際団結の政治的意識である。フォールズ・ロードには、世界の弾圧される民族を支持する壁画が見られる。パレスティナ人を弾圧するイスラエル、特にイスラエル政府がパレスティナを囲むために作った「壁」を弾劾する。ボリビアでゲリラ闘争したチェ・ゲバラは良く出る。（ゲバラにほんの少しアイルランド人の血が入っていたのは有名な話である。）南アフリカのネルソン・マンデラが出たりし、ベルファストの平和壁はアパルトヘイト時代の南アと同じことだと強調する。同じような理由で、アメリカ南部の黒人弾圧とマーティン・ルーサー・キングやフレデリック・ダグラス（Frederick Douglass）の戦いは人気テーマでもある。一方プロテスタント系壁画には、アイルランドと英国以外の国に関係するものは見当たらない。

ここで紹介するのはスペインのバスク独立運動支持の壁画である。黒っぽいヨーロッパの地図に、スペインの少数民族の地域だけはそれぞれの独立運動の旗で塗り埋めてある。ポルトガル国境の北にいるガリシア人、東北のカタラン人、そしてフランス国境に隣接する、地図から飛び出ているバスクの国。「スペインではなく、フランスでもない」（NOT SPAIN NOT FRANCE）と書いてある。地図は決して正確ではないが、スペインの民族問題に充分詳しい。バスク人が特に強調されるのは、北アイルランドのカトリックと似ている状況だとされるから。小さい国が独立を求め、大きな国に弾圧される。この壁画にこそ見当たらないが、バスク独立運動の武装団体、ETA³⁸とIRAを比較する場合もある。偶然ではあるだろうが、バスク国旗のデザインは英国のユニオン・ジャックと似ているが、色は南アイルランドの緑・白・オレンジに近い。バスクの地図が入っている丸の裏にアイルランドの国旗（上）とバスク国旗（下）が描いてあり、その似てい

ることを強調している。一番上に“ASKATASUNA”と書いてあり、これはバスク語で「自由」を意味する。一番下に「バスク国に自主性を」(Self-determination for the Basque country)と書いてある。

スペインの民族マイノリティは宗教的にカトリックであり、独裁者のフランコ総統と闘った「共和派」(Republicans)だったので、北アイルランドのカトリック人には仲間意識が出やすいと言えるが、世界の弾圧される人間と団結する連帯感がフォールズ・ロードの壁画ではよく見られる。日本の部落解放同盟の国際協力運動 IMADR (International Movement Against All Discrimination) と似ているかもしれない。

さて、今度は平和の壁を越えてプロテスタントサイドのシャンキル・ロードの壁画を見よう。

写真9：シャンキル・ロードによるこそ



5. シャンキル・ロードによるこそ

ベルファストの中心から北西の方向に歩き始めるとシャンキル・ロードに入る。その「入口」にこの5枚の壁画がワンセットになり、シャンキル・ロードの本質がすぐ伝わる。先ず真ん中のイメージは強烈である。赤い手が三つあり、左から「ここにいるよ」という挙げた手、人を殴る拳の手、そして握手を求めて差し出されている手。その三つの手の字幕は「我らは誇り高い、屈しない、友好的」(WE ARE PROUD, DEFIANT, WELCOMING)と書いてある。部外者には不気味な印象を与える。同じ赤い手が殴りに来て、握手に来る。あるいは同じ人が右手で殴る、左手で握手を求めめるか³⁹。戦闘的でありながら愛されたい忠誠派の意識がもろに出ている。

「アルスターの赤手」はもともとオニールという有名なアルスター士族の家紋であった。アルスターの古い神話によると、アルスターの王座を狙っている候補者が三人おり、ボートレースで勝負することに決まった。レースが終わり間際で遅れていたオニール氏は勝つ見込みがないように見えたが、土壇場で自分の右手を刀剣で断ち切り、川の向こう側まで投げつけた。ルールにより「最初に向こうに手を付ける人」が勝つので、自分の手を犠牲にしてアルスター⁴⁰の王座に就いた。手が赤くなっているのは血まみれだからである。

今でもアルスターの赤手がアルスター忠誠派の一番意味あるシンボルである。しかしそのイメージとその裏にある神話は、どう解釈すればいいか。忠誠派はオニールの勇敢性の象徴として見

る。でも見方により、インチキでレースを勝ったオニールの倫理性が問われるのではないか。あるいは王冠のほしさに自分の右手を犠牲にする男の権力欲が恐ろしいではないか。あるいは、昔の貴族は知恵があり権力争いを非暴力的な形で解決しようとしたところ、オニールがその非暴力的な仕組みを覆して、やはり刀剣で勝負を決めた... など。アルスターの赤手は派閥により、憧れの目標であり、不気味な、忠誠派の血に飢えた性質をもの言うシンボルでもある。プロテスタント系の特に暴力的な準軍事組織の一つは赤手部隊 (Red Hand Commando, RHC) であった。

壁画の三つの赤手のうち、左の方はオーソドックスで、北アイルランドの旗にも出ている。真ん中の拳は忠誠派の準軍事集団 (UDR, UVF, RHC 等) が好んでシンボルにする。一方右の握手版はここでしか見たことない。

三つの赤手の左と右に四つのパネルがある。左から：

1. 第2次世界大戦、ベルファストの夜間空爆。右は西カーク長老派教会 (West Kirk Presbyterian Church)、中央はニッセン・ハット (Nissen hut, シェルターとして使われる蒲鉾型防空壕)、右は街並みで上はドイツの爆撃機がサーチライトの光線を浴びている。ベルファストはドイツの爆撃を受け一夜で 1000 人死亡し、イギリスの都市としてロンドンに次いで二番目に死者が多かった。一方、南アイルランドは中立を守り、アドルフ・ヒトラーが死んだ際、大統領は在ダブリンのドイツ大使に訪問してお悔やみの意を伝えた。忠誠派の英国への忠実性と劇的に違うのである。右下のヒナゲシ (ポピー) は英国では戦争の犠牲者のシンボルである (下の写真 11 のコメント参照)。
2. スコットランドの兵士のような制服を着ているフルート奏者 (fluter) がプロテスタントのオレンジ会の行進に参加するビジネス・スーツと山高帽姿の男に面して焚き木の山の前で立っている。毎年、ボイン川の戦い記念日の前夜 (7月11日) にプロテスタント・忠誠派は大きい焚火を多く焚く習慣がある。ウィリアム三世の軍隊をボイン川に誘導したとされる焚火を記念するものである。ここ数十年、忠誠派のテロ組織が影響力を次第に失ったと同時に、行進バンドが逆に人気を増してきた (MacDonald 2010)。そのスタイルにスコットランドの影響が強い。武装組織ではないが、カトリック集中地を行進して反カトリックの歌を歌うことは縄張りを守るという意味合いがあるとよく指摘される。
3. プロテスタント青年たちの趣味をテーマにするパネル。ノートパソコンとスマートフォンはソーシャル・ネットワークキングの道具。その前にサッカーボールがあり、チームの名前の一部が見られる。“MFIELD FC”の“M”は“N”の間違いで、これはリンフィールド (Linfield) というベルファストのプロテスタント系サッカー・チームのことである。ボールに描いてある城はベルファスト・キャッスルであり、リンフィールド FC の紋章にある。パネルの三分の一を埋めて映像を支配するのは巨大なボクシング・クラブで、色は赤手とまったく同じ「赤」である。アイルランド全土に人気がある。暴力をスポーツとして書き直し、正当化する意味もある。
4. シャンキル・ロードの代表的な建物を3軒紹介する。左上は西ベルファスト・オレンジ・ホール (West Belfast Orange Hall) というプロテスタント集会所で、右上は聖マシュー・

アイルランド教会 (St Matthew's Church of Ireland) である。手前の特徴のないモダンな建物は商店街の店である。1993 年に IRA に爆撃され、死者 10 人も出たフリゼルのフィッシュ・ショップ (Frizzell's Fish Shop) ではないかと思ったがそういうつもりはないと関係者に聞いた。街並み全体は灰色一色で描かれていて、曇っているようである。しかし民家の一つに丸い壁画があり、やはり白馬に乗っているウィリアム三世が描かれている。これはプロテスタント派のシンボルと呼んでいいぐらい、決まったウィリアム三世のポーズである。その壁画の中の壁画では青空が広がっていて、映像の唯一なカラフルな場面である。華々しい過去へのノスタルジーが強く感じられると同時に、特殊な意味合いもある。忠誠派の古いスローガンの一つは「我々は決してアイルランド共和国の灰色の霧のためアールスターの青空を捨てることはしない」 (“We will never forsake the blue skies of Ulster for the grey mists of an Irish Republic”)。誰が、いつ言ったか、はっきりしないこのスローガンは記念碑に書かれることがあり忠誠派の人なら誰でも知っている。

全体の上に「シャンキル・ロードによろこそ」 (WELCOME TO THE SHANKILL ROAD) という見出しがある。2 メートル程度の壁の上にさらに 50 センチぐらいの錆びた大釘があり、登り超えようとする人を防ぐ。

よくよく見れば、壁画の外側の左下に「BLAZE FX」と書いてある。これはベルファストのアーティスト共同組合で、問い合わせたところ、GREATER SHANKILL ALTERNATIVES (広域シャンキル・オルターナティブ) という青年犯罪予防団体に依頼され、2010 年の秋シャンキル・ロードの青年たちを集め、彼らが考えたテーマを取り上げ集団で作ったそうである。真ん中の 3 つの手以外の 4 枚はポラロイド写真というつもりで、シャンキル・ロードの文化を表現しているそうである。要するに「コミュニティ・プロジェクト」である。

(この壁画の解釈に当たり、BLAZE FX のグレン・ブラック Glenn Black、それに北アイルランドの社会学者ダラック・マックドナルド Darach MacDonald に個人連絡でお世話になった。)

写真 10：放置された



6. 放置された！まあ、一人でも大丈夫（シャンキル・ロード、クリミア・ストリート周辺）

シャンキル・ロードでは、昔と現在を結ぶテーマが良く見られる。この壁画はレックス・バー（Rex Bar）という有名なプロテスタント系パブ（1865 年開店、写真 3）の外の壁に塗ってある。ペアの壁画で、勇敢なプロテスタント人女をテーマにする。左は 1914 年、第一次世界大戦の場面で、「放棄」された女が鉄砲を持ち、自己防衛で構えている。長い黒髪は風に荒らされ、ユニオン・ジャックと同じ方向になびいている。風は時代の危ない政治的な流れを意味する。「放置された！まあ、一人でも大丈夫だ」（DESERTED! WELL - I CAN STAND ALONE）という字幕がある。これに二つの意味が読み取れる。(1) 彼女の夫は英国軍の志願兵になりヨーロッパ大陸に行ってしまったので、自分一人で盛り上がっているカトリック共和派から家庭を守ることになった。(2) この女はアルスターそのものを意味している。ドイツと戦う英国軍はアルスターを守る余裕がない。自己防衛するしかない。アルスターを女として描く絵や詩がよくあり、イングランドはその女を愛したのに今見捨てる恐れがある男——こういった性別イメージでイングランドと（北）アイルランドの二ヶ国関係を表現するのが定番である⁴¹。

一方右のイメージも鉄砲を持つ女だが、今度は現代で、南アイルランドから北に入ってくるカトリック系テロ組織の攻撃から、トラクターに乗って働いている夫を守る農家の妻である（A protestant farmer's wife guards her husband against sectarian raids from across the border）。北アイルランドの当局に抑えられて国境の南にベースを移した共和主義武装組織は確かにあった。彼女が持っているのは軍事的な鉄砲ではなく、農民がウサギや鳥を撃つに使う銃身を二本備えた猟銃である。大変なときの自己防衛である。

両方の絵は青空をバックにしており、薄い白っぽい部分は弱い太陽の光を表現する。しかし 1914 年の激しい風に対し、現代の場面は風がなく、物静かな雰囲気がある。太陽がもう少し出ており、女の鉄砲の影が白いコートにはっきり写っている。1914 年の女はがっちりした男っぽい人なのに、現代の女は細く、もっとオーソドックスな美人である。1914 年女は自信満々でか

すかに笑いを浮かべているのに対し、現代女はバンダナを顔に着けているから笑っているかどうかは分からない。しかし二人ともクールな、慌てていない目つきをしている。

二人の女の上に二つのプロテスタント系組織の紋章がある。1914年女の上の頭に青年志願兵隊（Young Citizen Volunteers; YCV）の紋章が見られる。血染めのバックグラウンドにシャムロック（アイルランドの代表的植物）の葉っぱがあり、その上に、やはり、アルスターの赤手。このYCVは元々1912年設立の忠誠派武装組織で、アルスター義勇軍（UVF）に組み込まれ第一次世界大戦英国軍の第36師団（アルスター師団）の第14大隊として戦った。1972年、同じ名前と紋章が、新しく発足した第二UVFの青年団体に使われた（注13参照）。

現代女の上にその第一次世界大戦で戦ったアルスター師団の紋章がある。その左上は英国のユニオン・ジャック、右上はアイルランドの竖琴である。現在のアイルランドの政治ではありえないコンビネーションだが、1916年の段階ではアイルランドはまだ分裂されていなく、島全体は英国に入っていた。竖琴の上に英国王の王冠が浮かんでいる。下半分にはアルスターの赤手の周りに九つのシャムロックの葉っぱがある。それはアルスターの9州を意味する。この紋章は「ソム戦闘のアルスターの犠牲」を意味する。

写真 11：バヤード・ソム協会



7. バヤード・ソム協会（シャンキル・ロード、アバディーン・ストリート周辺）

厳密にいうとこれは壁画ではなく、より正式なモニュメントである。1975年8月13日、シャンキル・ロードの飲み処、バヤード⁴²・バーがIRAの爆弾テロで破壊された。女性2人を含む5人が殺された。高いフェンスで守られているシャンキル・ロードの公園の前の記念碑と祭壇のような感じで、2001年、つまりベルファスト合意の後で作られた。被害地の前と後の写真、被害者の顔写真、名前と年齢が書いてあり、真ん中に大きな金色の文字で「5名の罪のないプロテスタント人、殺害された」（5 INNOCENT PROTESTANTS MURDERED）と書いてある。プロテスタント系アイコンがたくさん見え、中央には上の写真10（「放置された！」）と同じく第一次世界

大戦時のアルスター師団の紋章がある。少々違うバージョンであり、英国王の王冠は紋章全体の上大きく描かれていて、イングランドの国旗（聖ジョージ十字架）が二つもある。英国連盟よりイングランドの優越性が強調されている。紋章の下に「バヤード・ソンム協会」（Bayardo Somme Association）と書いてある。これはもちろん第一次世界大戦のソンム戦闘を指す。

左と右に見えるヒナゲシの花輪、そして右下のヒナゲシの十字架もソンムを含む第一次世界大戦のフランス北部の戦闘の記念品である。数十万人も死んだその戦場に、戦争が終わってからヒナゲシが大量に咲いて、その赤い花では亡くなった兵隊たちの血が現れたと言われる。それで終戦記念日（11月11日）は英国全国で人々が老兵支援募金にカンパシ紙のヒナゲシを貰い、それを襟に着けるが、シャンキル・ロードでは毎日が戦争記念日である。11月以外に紙ヒナゲシが見られるのはここだけではないか。

祭壇の前に二本の旗があり、左はイングランドの聖ジョージ十字架で、右はスコットランドの聖アンドリュー十字架である。イングランドの旗の右に1975年の事件を生々しく描写する文章がある。そこにはIRAを「殺人者の連中」（murder gang）と弾劾し、「こういう風に罪のないプロテスタント人が残忍にIRAの野郎どもに殺された場所は、愛するアルスターのあらゆるところにある⁴³」と書いてある。

記念門の天辺に「われらが忘れないように」（“Lest we forget”）と書いてある。ベルファストでよく見かける言葉である。しかし何を忘れてはいけないのか。バヤード・バー事件はひどいテロ事件ではあったが、その2週間前、プロテスタント系武装組織UVFはカトリック系アイルランド人のポップ・グループ、マイアミ・ショウバンドを路上で攻撃しバンドメンバーを3人殺し、2人にけがを負わせた。バヤード・バー虐殺はマイアミ・ショウバンド虐殺の仕返しであった。バヤード・バーの犠牲者のうち4人は一般市民だったが、一人はUVFのメンバーであった。IRAの言い分としてUVFがバヤード・バーで会議を行うことがよくあった...など。あるいは、パブ爆弾テロと言えば、バヤード事件の4年前、1971年12月4日、北ベルファストのカトリック系飲み所、マゲークス・バー（McGurk's Bar）を、忠誠派のUVFが爆撃し、15人の「罪のないカトリック人」が殺害され、17人が受傷した。これはバヤード爆撃のモデルでもあった。

こういう風に両サイドは被害を「絶対に忘れない」と同時に、自分が起した虐殺を完全に忘れてしまう。ジョージ・オーウェルはこの心理学的技を「二重思考」（doublethink）と呼んだ。部外者にはあまりにも露骨な偽善だから理解しにくいだが、これは北アイルランド紛争の遺物である。ちなみに言葉運びは興味深い。被害者は「プロテスタント」と呼ぶが、加害者は「カトリック」ではなく「アイルランド共和派」（Irish Republicans）となっている。アイルランド紛争の本質は政治なのか宗教なのか、よく論じられる。ここでは「我ら」は宗教所属、「彼ら」は政治所属で定義される。政治・軍事的な「彼ら」が宗教的な「我ら」を虐殺する。で、その逆の場合はなかったことにする。

もう一つ部外者に理解しにくいのは、難事の爆撃事件とソンム戦闘の関係。バヤードの被害者は罪のない非戦闘員だったと強調する。しかし彼らを記念する組織は「バヤード・ソンム協会」。具体的な関連性はない。その観念的な関係は、このカトリック対プロテスタントの二者闘争を記念するメモリアルに描かれていない第3者の存在、すなわち、「英国」である。1916年の戦争時、

忠実なアルスターの人々は英国のために戦う。しかし英国はその犠牲を有難く思うことなく、1922年アイルランドの4分の3以上を共和派に譲ってしまう。そしてだんだんと北アイルランドも脅かす共和派が、罪のないプロテスタントを殺そうとしたとき、英国軍は守ってくれなかった。その裏切られた恨みは、部外者でもバヤード・メモリアルで感じ取れる。

写真 12：狙撃兵



8. 狙撃兵（ホープウェル・クレセント、シャンキル・ロード周辺）

シャンキル・ロードより少し北に行くと、小さな袋小路が並んでいる。家は狭いテラスハウスで、プロテスタントの低収入層が住んでいる。テラスハウスは日本の昔の長屋と似ている感じで、家と家の間に空きがない。でもテラスの両端に広い壁があり、それに壁画を描くのは伝統である。美術性の高いものが多く、壁画は共同体の自慢である。しかし今まで犠牲者や殉教者になった壁画は何点か見たが、ここには一味違う壁画がある。身を隠して相手を狙う「スナイパー」（狙撃兵）が生々しく描かれている。部外者に恐怖を与える「加害者」である。軍服に黒い目出し帽で顔が分からないようにする、「テロリスト」のイメージそのものである。でもこれは相手のテロ活動を批判する壁画ではなく、自分サイドの（いかにもテロリストの姿である）準軍事組織を絶賛する壁画である。

やはり歴史的な連続性がテーマで、1893年設立のアルスター防衛連合（Ulster Defense Union, UDU）、1971年設立のアルスター防衛協会（Ulster Defence Association, UDA）とその関連武装組織であるアルスター自由戦士団（Ulster Freedom Fighters, UFF）の相互関係を強調する。UDUは政治団体でアイルランド独立に反対していた。壁画では“UDU member”が兵隊のような姿になっているが、UDUは武装組織ではなかった。UDAはIRAと闘った最大の準軍事組織だったが、不法行為を行うとき、UFFという名前を使っていた。建前では違う組織で、カトリックサイドのシン・フェイン党（政治）とIRA（武装）と同じような役割分担を狙っていた。UFFは1973年で英国政府に不法組織として禁止されたが、UDAが禁止されたのはずっと後の1992年だった。UDAは2007年武装闘争中止宣言したとき、UFF解体も発表した⁴⁴。その後、次第にUDUという名前を、自分のことを指すのに使うようになった。つまり、歴史的にはアルスターの忠誠派は、

政治的な色を強調するときは UDU、武装活動を強調するとき UFF、その間は UDA という形でこの三つのネーミングを使い分けてきた。

とにかく、スナイパーはテロリスト・卑怯者だとみなされることが多い。90 年前のソム戦闘で、全面攻撃してドイツの機関銃の弾を受けたアルスター師団の戦い方とは正反対である。効果的ではあるが勇敢とは言えない。この壁画で、あえてその卑怯者を自分のヒーローとして描くのは、相当極端な敵対意識があることを意味する。部外者がこの壁画を見ると、自分が脅かされている・狙われているとしか思えない。挑発的な壁画を撤去する動きがあるなかでも、この恐ろしいイメージは今だに残っている。やはり、政治家が敵対関係をやめ仲良くなっても、ベルファストのストリートが平和になるのはまだまだ先であろう。

結論

政治的にずいぶん平和に向かい進んできた北アイルランドだが、西ベルファストの両共同体の街を歩くと決して平和的な雰囲気ではない。街を分裂する壁、あちらこちらで見られる壁画を見ると、両サイドの憎しみが強く感じられる。

両サイドの壁画は全く同じではない。カトリック系は昔の IRA 大物を描いても、それは闘う姿ではなく、ハンストで犠牲になったときのイメージが多い。20 世紀以前の歴史的なテーマは見当たらないが、アイルランドと直接関係ない世界の弾圧された民族の戦いは人気テーマである。一方プロテスタント系はもっぱらアルスターとその英国との関係を取り上げ、国際的なテーマは無しである。その代り古い歴史は頻繁に出て、特に 1690 年のボイン戦闘、1916 年のソム戦闘は定番である。

壁画のテーマを考えると、「何があるか」と同時に「何がないか」も考える必要がある。プロテスタント系とカトリック系の一つの大きな共通点は、「宗教」をテーマにする壁画が殆どないということである。プロテスタント・サイドにウィリアム三世はよく出るが、マルティン・ルターやジョン・ウェズリーは見当たらない。カトリック・サイドでは、ウルフ・トーン (Wolfe Tone、18 世紀でアイルランド人連盟会を設立したアイルランド独立運動家) は出るが、どんな時代のローマ法王も、出ない。やはり、シャーローとマターが言うように、この紛争は宗教に関するものとしてとらえるのは「勘違い」なのか⁴⁵。言い換えれば、北アイルランド紛争には宗教は政治的な属性のラベルに過ぎない、という印象である。

壁画は、両サイドの憎しみを延長する問題性があると同時に、ベルファストの文化的な遺産でもある。そこで紛争と関係ない壁画をベルファストに作る動きは両サイドに見当たり、場合により公的補助金が画家に支払われ、その画家が地域住民と協議しながら美術品を作るコミュニティー・アート・プロジェクトも出ている。しかしここにも差がある。カトリック地区には自殺や貧困という社会問題と取り組む壁画が見られるが、プロテスタント地区の新しい、紛争壁画を塗ってできた平和的な壁画は、重たい社会問題を取り上げることなく、ボクシングやサッカーのスポーツ・ヒーローや、文豪や音楽者など、文化的なものが多い。2009 年にはジャンキル・ロードの近くにマター・ルターの壁画がやっと現れた⁴⁶。

壁画、それは元々一人の市民がペンキと刷毛を手にして、自分と自分の共同体の意志を表現す

るために壁にイメージを塗ったものである。公的資金を使い、プロのアーティストが作った壁画は、その原型からずいぶん離れてしまった。「下からの美術」ではなく「上からの美術」であるのは否定できない。その「オフィシャル」な壁画はさて置き、一般人が自分の金と時間を費やし作った壁画を見る限り言えるのは、北アイルランドの紛争は、人間のこころでは、まだまだ終わっていない、ということである。

最後に見せるイメージはフォールズ・ロードとシャンキル・ロードの間の「平和の壁」に、だれかが塗ったスローガンである。

写真 13：何でもいいよ



ここに書いてあるのは、「何でもいいよ」というか、「どうでもいい」というか「まあいいや」のような、英語で“IT'S ALL GOOD”という表現である。これから、寛容と諦めを混ぜるこのスローガンで表現される気持ち、北アイルランドの住民に必要なのではないだろうか。

<参考文献>

- Bowcott, Owen, and Mark Oliver, 2007. "Another brick in the wall: Despite progress in the peace process, security divisions are being extended across Belfast." *The Guardian*, 4 July 2007.
<http://www.guardian.co.uk/society/2007/jul/04/guardiansocietysupplement.northernireland>
- Dartnell, Michael. 2000. "Walls and Places: Political Murals in Belfast"
<http://web2.uwindsor.ca/courses/ps/dartnell/wallandplaces.html>
- デュルケーム、エミール、1932年、『自殺論』東京：宝文館、(Emile Durkheim, *Le Suicide*, フランス語、1897年)
- Macaulay, Tony. 2008. "A Process for Removing Interface Barriers: A discussion paper proposing a five phase process for the removal of 'peace walls' in Northern Ireland."
<http://cain.ulst.ac.uk/issues/segreat/docs/macaulay200708.pdf>
- MacDonald, Darach. 2010. *Blood and Thunder: Inside an Ulster Protestant Band*. Cork, Eire: Mercier Press.
- McCann, Fra. 2000. "Tribute to Kieran Nugent." Coiste Ireland website.
http://web.archive.org/web/20060518172441/http://www.coiste.ie/politicaltours/kieran_nugent.asp
- McDonald, Henry. 1999. "The walls that won't come down: Belfast's partitions have outlasted the Berlin Wall – and they're set to stay." *The Observer*, 7 November 1999.



<http://www.guardian.co.uk/uk/1999/nov/07/northernireland.theobserver>
 Mulholland, Marc. 2003. *Northern Ireland: A Very Short Introduction*. Oxford and New York: Oxford University Press.
 O'Hagan, Sean. 2012. "Belfast, divided in the name of peace." *The Guardian*, 22 January 2012.
<http://www.guardian.co.uk/uk/2012/jan/22/peace-walls-troubles-belfast-feature?intcmp=239>
 O'Hara, Mary. 2011. "Sharp increase in suicide rates in Northern Ireland." *The Guardian*, 16 March 2011.
<http://www.guardian.co.uk/society/2011/mar/16/suicide-rates-northern-ireland>
 Pogatchnik, Sean. 2008. "Despite peace, Belfast walls are growing in size and number." Associated Press, 3 May 2008. Viewed on-line at *USA Today*.
http://www.usatoday.com/news/topstories/2008-05-03-1826820552_x.htm#uslPageReturn
 佐藤亨、2011年、『北アイルランドとミューラル』、東京：水声社。
 Shirlow, Peter, and Brenda Murtagh. 2006. *Belfast: Segregation, Violence and the City*. London, Dublin and Ann Arbor MI: Pluto Books.

<注>

- 1 ベルファストは北アイルランドの首都である。Belfast Agreement は Good Friday Agreement (聖金曜日協定) とも呼ばれる。二つの協定があり、一つは英国とアイルランドの国同士の協定で、両国が「北アイルランド人口の多数が英国に残りたいし、その意思を尊重する」が、北アイルランドに自分の議会など多少の独立性を与え、あらゆる政策に関して南アイルランドの政府の立場を尊重する、というような内容である。第二協定では、北アイルランドの様々な政党が暴力をやめ、カトリックとプロテスタントの共同体の存在を認めることを約束する。
- 2 「ライフル 1000 丁、セムテックス爆発物 2 トン分、重機関銃 20~30 丁、地对空ミサイル 7 本、火炎放射器 7 本、手榴弾 100 個以上」などである。出典： *Jane's Intelligence Review*, 2007 年号。
- 3 「忠誠派」(loyalist) は英国に忠実であり、unionist (連合派、つまり北アイルランドは英国連合王国に残る主義) とほぼ同じ意味だと考えられている。しかし、アルスター (Ulster) に忠実であるという別な説もある。アルスターは昔のアイルランドの 4 ヶ国 (Leinster, Ulster, Munster, Connaught) の一つであり、9 州からできている。現在の北アイルランドはそのうちの 6 州からできていて、残り 3 州が南アイルランドに入っている。いずれにせよ、忠誠派は宗教はプロテスタントで合同アイルランド反対だから IRA と長年闘ってきた。
- 4 "I want to see him in hell."
- 5 "I'd rather see him in heaven, redeemed and saved by the grace of God."
- 6 「第一大臣」と「副第一大臣」という肩書なのに、北アイルランドの憲法により、権力を平等に執行する二者権力制 (duarchy) である。
- 7 Peace lines (平和線) ともいう。
- 8 ベルファストの中心に Cromwell Street という道路があり、イングランドの現代に続く支配を表現する。
- 9 正式名称は Orange Institution だが、殆ど使われていない。
- 10 厳密に言うとボイン川の戦いは 7 月 11 日にあった。
- 11 イギリスのガーディアン新聞、オンライン版：<http://www.guardian.co.uk/2012/jul/12/orange-order-parade-belfast-riots?intcmp=239>
- 12 注 11 と同じガーディアン新聞：“The two factions chanted “scum, scum” at each other and at one point came close to hand-to-hand fighting.”
- 13 Ulster Volunteer Force. やはり歴史的な意識が強く、1910 年代のアイルランド独立に反対した軍団と同じ名前を選んだ。佐藤 (2011: 26) は 1910 年代の UVF は「1960 年代後半... 武装組織として活動を再開した」というが、40 年間以上の差があり、この二つの UVF に具体的な関係はない。
- 14 図 1~3 の統計データはアルスター大学が提供する CAIN (Conflict Archive on the Internet) のオンライン・データベースに頼る。<http://cain.ulst.ac.uk/>
- 15 図 1 と図 2 の合計死者が合っていないのは同じ CAIN サイトの中でもデータセットにより死亡事件の定義や期間に関して微妙に差があるからである。
- 16 モーラム氏は 2005 年、55 歳の若さで脳腫瘍で亡くなった。
- 17 BBC の報道：http://news.bbc.co.uk/2/hi/events/northern_ireland/focus/153629.stm
- 18 カトリック教徒なら、プロテスタント系共同体、プロテスタント教徒ならカトリック系共同体のこと。
- 19 ベルファストの名門大学。
- 20 たとえば 2005 年の事件はここにある。
http://republican-news.org/current/news/2005/10/repulsive_threat_to_catholic_g.html
- 21 インターネットを検索したところ、“left-footer” (左足) は両グループがもう片方のグループを指すために使われている。ここで左利きや左足は「変わり者」や「ドジ」な人の特徴であるという古い差別意識が見える。
- 22 www.belfasttelegraph.co.uk/news/education/51-of-northern-ireland-school-pupils-are-catholic-16065851.html
- 23 当時、直接統治 (direct rule) と地方分離 (devolution) の区別は調査票になかった。

- 24 “The peace line will be a very, very temporary affair. We will not have a Berlin Wall or anything like that in this city.”
(<http://www.telegraph.co.uk/news/uknews/1455245/The-security-wall-on-our-doorstep.html>)
- 25 Macaulay 2008:3 参照。
- 26 “A terrible beauty is born” (W.B. Yeats, “Easter 1916”).
- 27 “The Lark and the Freedom Fighter” by Bobby Sands.
http://marcella32.blogspot.jp/2005_01_01_archive.html
- 28 理由は調べても出てこない。頭から飛び込むようにガムシヤラな行動するから？彼はそういう性格だったとよく言われる。
- 29 正式名称はメーズ刑務所 (Her Majesty’s Prison Maze) である。Maze は地名であり、「迷路」を意味する言葉でもあるのは偶然だが、その刑務所のイメージをさらに恐くした。なお、Maze, Long Kesh, H Blocks と様々な表現があるが、全部同じ所を指す。ベルファストから約 20 キロ西の方にある巨大な施設である。
- 30 “Kieran died in 2000. They called him a ‘river rat’ because he spent his last days drinking by the river in Poleglass.” ポールグラスは西ベルファストのカトリック地域である。
- 31 <http://www.shutterstock.com/pic-92893921/stock-photo-belfast-northern-ireland-december-a-mural-shows-image-of-kieran-nugent-on-december.html>
- 32 <http://www.flickr.com/photos/puckpics/2848738905/>
- 33 2009 年は 260 件があり人口は 180 万人だから 0.14/1000 人だが、日本は約 0.24 で北アイルランドの倍に近い。
- 34 これにはそう驚くことはない。100 年以上前、エミール・デュルケーム (1932 年) が証明した：戦争時は団結の意識が高まり、人が自殺を控える傾向がある。大変なとき、自分を殺すのは我がまま、無責任だとされる。戦争が終わったら、ずっと自殺を考えていた人がやっつと実行する。
- 35 つまり、(1) 問題をきちんと認めよう。でも (2) 認めて落ち込むな。きみはその問題を解決できるから。
- 36 つまり、孤独を感じているあなたは、愛する人には一番価値があるものである。
- 37 http://www.artscouncil-ni.org/award/re-imagining_communities.htm 参照。
- 38 Euskad Ta Azkatasurra (バスク祖国と自由、1954 年設立)。
- 39 この壁画の赤手は右、右、左で、握手の手だけは左である。
- 40 佐藤 (2011: 64) は「島」に漕ぐレースだと言い、「この島はアイルランドである」と言うが、これは明らかに間違いである。これはアルスターの神話であり、アイルランド全体の神話ではなく、漕ぐのは海ではなく川である。
- 41 面白いことで、英国 (Britain) も女、ブリタニア (Britannia) として描くことがよくある。でもイングランド (England) はジョン・ブル (John Bull) というがっちりした男として描くのは一般的である。
- 42 Bayardo はスコットランド南部にたまにはある苗字で Baird と共通語源がある。このバーの持ち主はアイルランドに入植したスコットランド人の子孫だと思われる。
- 43 “There are many places akin to this all across our beloved Ulster, where Protestants have been maimed and killed.”
- 44 BBC の報道はここ：http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk_news/northern_ireland/7089310.stm
この重大な宣言は 07 年 11 月 11 日、第一次世界大戦終戦記念日に行った。
- 45 “... the misconception that the conflict is about religion.” (Shirlow and Murtagh 2006: 184).
- 46 ここで見られる：<http://www.belfastcity.gov.uk/publicart/default.aspx?id=114>